



北岡正子教授

北岡正子教授略年譜

昭和十一年（一九三六）一月十七日 山形県生まれ

昭和二十九年三月 新潟県立新潟中央高等学校卒業

昭和三十三年三月 お茶の水女子大学文教育学部文学科中国文学専攻卒業

昭和三十三年四月 東京大学大学院人文科学研究科中国語・中国文学専攻修士課程入学

昭和四十年三月 東京大学大学院人文科学研究科中国語・中国文学専攻博士課程所定単位修得後退学

昭和四十年四月 東京順心女子学園高等学校教諭（国語）に就任

昭和四十五年四月 関西大学文学部、経済学部（中国語）非常勤講師

昭和四十九年四月 関西大学専任講師（文学部）に就任

昭和五十九年四月 関西大学教授（文学部）に昇任

平成 元 年十月 関西大学文学部大学院委員会委員

平成 十一年六月 関西大学協議会協議員

平成 十三年四月 日本中国学会理事

平成 十三年九月 東方学会評議委員

平成十五年十二月 関西大学中国文学会会長

序

萩野脩 二

矍鑠たる北岡正子先生が七〇歳の定年をお迎えになる。凜然として立つそのお姿から、少しの老いも感じられない。関西大学文学部中国語中国文学専修の教員として、誠実で正当な意見を北岡先生は直言してこられた。そこには私的な情実を越えた正論があった。したがって、いかなる反対派も厳肅に耳を傾けた。この強さが北岡先生の特徴である。不正なものに妥協しないこと、それは、言うは易いが、なかなか体現できるものではない。だが、そういう人として誰もが一目置く人物として、北岡先生は存在した。

大学人として、そこには自らの学問研究に対する自負の念がなければ出来ぬことである。一貫して追い求めた北岡先生の魯迅（周樹人）像には、本人の意思とは係りなく圧力を加える時代の要請の下に、誠実に生きようとする人間の宿命が考察されている。その場・時空において生きざるを得ない人間の誠

意が文学となって表れる一つの形を、北岡先生は我々に示した。それが『魯迅 日本という異文化のなかで』という労作であり、『魯迅 救亡の夢のゆくえ』という力作である。それはまさに、北岡先生自らの軌跡であったと言えるであろう。

先生の経歴について、ただ履歴書に書かれたことをたどれば、一九三六年一月一七日に山形にお生まれになった。高校は新潟県、大学は東京であるから、なかなか一筋縄の幼年期少女期ではなからう。お茶の水女子大学を出て、すぐ東京大学大学院に入られた。この時から先生の学問との結びつきが緊密になったのであろう。時に一九五八年四月のことである。関西大学文学部には一九七四年四月に専任講師として着任された。爾来三二年間中国現代文学を教授されてこられた。もっともその前の四年間、非常勤講師として来ておられたから、都合三六年の長きにわたって関西大学と関係を持たれたのであった。この間、女性教師の少ない中、また社会の女性に対する目のいまだ開放的でない中、一人の知的営為をおこなう教師として自らの道を築き上げてこられた。妻として母として、数々の瑣事がありながら、私事を校務に関連づけけないといった毅然とした姿勢があったればこそ、今日の先生の位置がある。これも言うは易く、実行するのは困難なことである。困難を成し遂げてこそ、そこに風格と尊厳が加わることを先生は身を以って示したことになるう。

一九八四年一〇月からは文学部学生相談主事を四年間にわたってなされ、大学院委員会委員や運営委員を都合五年以上されてきた。そして大学協議会協議員を四年間おこない、大学運営の面にも力を発揮

されてこられた。

学外においても、日本中国学会の理事を四年間勤められ、二〇〇〇年四月からは評議委員を勤められている。また、一九九九年一〇月には関西大学でおこなわれた日本中国学会第五一回大会の総責任者として見事に大役を果たされた。そのほか、東方学会、日本現代中国学会、中国社会文化学会、日本台湾学会などに所属し、それぞれ評議委員などの要職に就かれている。

北岡先生は俳句を作られ、また絵も描かれ、情緒溢れる散文を時に発表される。ハンガリーのガラ・エンドレ博士との邂逅の文章は、一九九三年度の優れたエッセーの一つとして、ある選者に選ばれたことがあるほどである。

学生、院生にも「厳しき愛情」ともいえる姿勢で接し、進むべき前方を指し示した。我々は一人の教師として、学者として、さらには同僚として、北岡先生と二〇〇六年三月にお別れせざるを得ないことを残念に思うが、このように立派に生を続けられたことは、ある意味で幸せなことでもあったと思ひ、心から「ご苦労様」と言うことで、一つの区切りを迎えよう。

ここに、受業生をはじめとする関連のある者たちの文章を集め、退休記念の号とし、いささかの気持ちを捧げる。今後の北岡正子先生のご健勝を祈る次第である。

二〇〇六年三月吉日